10代・20代限定 真剣！しゃべり場
「性教育ってどうよ」「保健室という場所」「カミングアウトは？」

2015年・2016年に文科省から通達が出され、教育現場では性的マイノリティに対する理解が深まりつつあります。一方で、学習指導要領改訂案は多様な性について触れず、当事者はもちろん心ある教育関係者も戸惑いを見せる今日この頃。「異性愛限定主義」にも見える性教育を若者はどう感じているのか。通達の中で「研修を受けるべき立場」として人権担当・生徒指導担当とともに名指しされた養護教諭に当事者は何を望むか。本音を語っていただきました。

【参加者のセクシュアリティ】
MtF（2名） FtM（2名） FtX（2名）
G（3名） L（1名） ノンセク（1名）
模索中（2名） シスジェンダーヘテロ（2名）

【ルール】
聴くだけ可。○×うちわと「もくひ券」を自由に使ってよい。ここだけの仮名を使用。この場で話したことはこの場に置いて帰りましょう。

【聴く人】 りんこ

―性教育って、覚えてますか？

「高校生の頃だったと思うんだけど、女性と男性の体についての授業を受けたことがあります。成長したら体はこう変わっていくんだよ、とか」

「子宮とか卵巣とか、精巣で精子をつくって、とか」

「保健のテストもあったよ。『この器官を何というか答えなさい』みたいな知識を問うもの」

「すごく強烈に覚えてることがある！高校の時に外部の先生が来られて、コンドームの使い方を教えられた」

「実物で？」

「そう、袋を破って取り出して、膨らませて（笑）」

「すげえー（笑）」

「中学になると性教育は男女に分かれるよね」

「そうそう、男性教師は男子を担当して『お前ら、やらかすなよ』みたいな話をしてみんなめっちゃ笑ってて、女子のほうは『自衛は大事だよ、男を甘く見るな』みたいな」

―性教育って、役に立った？

「高校で性感染症の名前とか、妊娠についてとか、詳しく教わったよ」

「ボクは授業を真面目に聞いてなかったから、実は何も覚えてない、ごめんなさい（笑）」

「私の学校では、持ち物の色とか服装とかは生まれた体が男とか女とかで決まるものじゃないから、たとえば男の子がピンクのカバンを持ってても変じゃない、っていうことを先生が言ってくれて、すごく自分も楽になった。性教育なのかどうなのかは、はっきりわからないけど」

―逆に性教育で嫌な思いをしたことはある？

「性教育って『男』と『女』の話しかなくて、自分には関係ないって思ってた。性教育だけじゃなく『男女』前提の話をされることが多くて、『そうじゃないといけないのか』という気持ちにさせられた」

「これからの自分の人生を考えましょう、みたいなのがあって、いつ結婚していつ子どもが生まれて、っていうことを書かされたことがある」

「私もあるよ、それ。『将来を考えよう』っていうホームルームで『結婚』が出て、『何歳ごろ結婚したいか』『子どもは何人ほしいか』『異性のどんなところが好きか』について発表することになって、自分は結婚とか考えられないと悩んでいたし、ちょっときつかった」

―小学校4年生あたりと中学校で「異性への関心が芽生える」という内容を習うことになってるけど、それは？

「自分は小学生の頃はまだ自覚がなかったから、『そうなのかー』っていう程度でしか捉えなかった気がする。それからあと、そういう話が授業で出て来た覚えもないし」

「中学の時だったと思うけど、同性愛もあるよ、みたいなことを先生が話してくれた」

「そんな学校もあるんだ、羨ましい（笑）」

「自分はネットがあったから、教科書がすべてじゃないと思ってた。学校ではこう教えるけど、自分はこっちだな、って」

「そもそも自分とは違うと思ってるしね、学校って。どうせダメだから、こっちから何か言いたくもないし聞きたくもない、みたいな感じかなあ」

「小学校の頃はそんなに気にしなかったんだけど、中学になると自分も荒れてて保健の教科書を睨みつけたり（笑）」

―性教育を通して、命の誕生の神秘とか、生まれてきたことへの感謝とか、感じた？

「どうだろうなあ。その手の話はよく覚えてない。っていうか、覚えてないくらい、どうでもよかった（笑）」

「そういうの、なんだか不自然なんだよね。そもそももう生まれてきてるのに、何を今さらって」

「『生まれてきてくれてありがとう』は、自分でもよくわからないけど何か傷つく。嫌な気分になる」

「それって、何か事情があって生めなかった人も傷つくよね」

「シングル家庭の子どもも、これは複雑だろうなあ」

「親との会話の中で自然に出て来るのはいいけど、人に言ったり言わされたりすることじゃないよね。その子どもの背景を知らずにそれをやるのはダメだと思う」

「言いたい人は勝手に言ってればいいじゃん、押し付けるなよ。って感じ（笑）」

―どういうことを性教育で教えてほしい？

「ネットの情報って偏っているところもあって、このまま実行したらいろんな人が傷つくんじゃないかというものもありますよね。学校で教えてもらって唯一よかったなと思っているのは『男の子は女の子に会う前に一発ぬいていけ』（笑）。これって、学校だから教えられることだと思う。本当に必要で正しいことを、子どもにもわかりやすく楽しく教えてくれる性教育なら、どんどんやってほしい」

―具体的で実践的な内容だよね。でも、そうすると異性愛前提に偏るけど、どうなんだろう？

「逃げ場があればOKだと思う。『そうじゃない場合もあるよ』っていうひと言があれば」

「そうそう、セクマイのこともちゃんと話してくれたら」

―セクマイのことも性教育の中で扱うべき？

「どちらとも言えないなあ」

「家庭科で扱うのはいいなと思った。こういう家族の形もあるよ、って。高校の教科書には載ってたと思う」

「大々的にはやってほしくないけど、セクマイの人がいるっていうことには触れておいてほしい」

「性嫌悪をもっている人もいることも伝えてほしいね」

「保健体育でセクマイを取り上げると『性』の部分、SEXの部分だけがクローズアップされてしまう気がする。そういうことをイメージして欲しいわけじゃないのに」

「どうしても極端な捉え方になりがちなんだよね。それぞれの人格があって、セクシュアリティはその人の属性の一つなのに、人格を飛び越してそこだけを見られて、ますます追いつめられる人もきっといるんだろうと思う。すごく将来的には、そういう教育がきちんとなされるべきだとは思うけど、今現状でとか、直近でと

いうのはどうかな」

「自分は保健の授業とか性教育とかはすごく嫌いで、押し付けられている感じがいやだった。そういう気持ちをもつ人はセクマイとか関係なく他にもいると思う。授業を1時間使ってそれだけを教えるのではなくて、いろんな時間に少しずつさらっと触れるのがいい」

「まだセクマイのことがきちんと知られてない今の段階で、授業で扱うのはどうなんだろうね。もう少し社会の理解が進んでから教科書とかに載せる、くらいがよくない？」

―社会の理解が進んでから、と言ったけど、じゃあ社会の理解は誰がどこから進めたらいい？

「ここ！（笑）」

「よくわかっている人が学校で話す」

「先生にマニュアルを配るとか。発達障害の人の対応は、先生たちはマニュアルとかつくって頑張ってたじゃん」

「セクマイの人は先生に絶対言わないから、先生はわからないっていうところが大きく違うよね」

「自分の顔と名前を出して言える一部の人の意見だけではどうしても偏りがあると思う。それができない人たちの声もきちんと集めて、いろんな角度から啓発していかないといけないじゃないかな」

「すごくつらい目にあったとか、今現在も困ってるとか、周囲に理解されないとか、困ってる人ほど声を出せずにいるような気はするね」

―中学ですごく荒れた人もいるみたいだけど、中学生のころって一番しんどいのかな？

「小学校の頃は、そこまで悩まないんですよ。現実をあまり考えずに元気に野原を駆け回っていればいい（笑）。今の小学生はどうなのかわからないですけどね」

「男女に分けられる場面って特に中学からやたら増えるよね。自分には選択肢がないと思ってたなあ」

「中学って何となく閉鎖的っていうか。身体も成長するし、男女で分けられることもあって『男』『女』をどうしても意識して、なんだか居づらかった。高校に入ったらバイトとかで外の世界と接することが増えてくるけどね」

「そうそう、中学って、何があってもここで何とかしなきゃいけないんだという気持ちがこっちにもあるから、逃げられない雰囲気がある」

「身体とかの違和感は私の場合そこまできつくなくて、制服は『自分が選んだ服装じゃなくてみんな着るもの』っていう感覚でなんとか着られた。『男女分かれて』という場面は大学に入ってもやっぱりあって、それはウンザリだね」

―すごく困っているけどどこにも頼れる場所がないという人に向けて、学校にポスターとかどうだろう？

「ポスターよりリーフレットとかチラシとか、さっと取れるものがいい。ポスターはじっくり見られない」

「じっと見てたら絶対なにか言われそうだもんね」

「ポスターなら職員室かな」

「カードならポケットとかに隠しやすいけど、貰いに行きにくいなあ」

「教室で全員に配られるカードがあるよね、なんとかテレホンとか。そんなふうにしたらどうかな」

「みんなに知ってもらうほうがいいから、全員に配るのはいいと思う」

―カードとなるとかなり小さいよね。何を書いておく？

「『いろんな人がいるよ』（笑）」

「そうそう、それで『詳しいことはこちら』ってＵＲＬ」

―どこのＵＲＬを載せるかが問題だね。

「プラウド岡山（笑）」

―保健室のこと、養護教諭のこと、ちょっと聞かせてください。保健室に通い詰めたことはある？

「中学の時に一時期と、高校に入ってから通ってた。あんまり人がいないし、保健の先生が優しいおばあちゃんで（笑）。いろいろ話を聴いてもらってたなあ」

「小学校1年から3年くらいまで、よく保健室に行ってた。1年の時はからだの性で学校に通ってて、保健室の先生なら私の男性器を取ってくれるんじゃないかと思って（笑）、『先生、治して！』って」

「男女同数でグループつくるように言われることがあって、そういう時に友だちから『お前はどっちもだけど、どっちにすればいい？』とか言われて、そういう愚痴を保健室の先生に聴いてもらったり」

「保健室は休み時間とかに軽く行ける雰囲気はあった。相談室とかは行きにくいね」

「ボクは保健室って行きづらかったなあ。ケガした時だけっていうイメージがあって」

「教室にいないことがわかっちゃうから、ずる休みだと思われるし、『なんで？』と聞かれたときに答えづらいし」

「私は追い返されたことがあるよ」

「私は『授業は絶対に休まない』と心に決めていたから、保健室にはいかなかった」

「私は小学校3年から不登校で中学3年間は別室登校を貫きました。別室がなければ保健室という選択肢もあったんだろうけど、みんなが言うように『保健室はケガをした人が行くところ』という意識が強くて、自分はそこにあてはまらないというか、行くと責められるのではという思いがありました」

「病院っぽさが強いんだよね」

「小学校5．6年のときにいじめられてた。セクシュアリティとは関係ないことだったんだけどね。そのころは、保健室ってケガか病気でないと入れないと思ってて、自分は平熱が高くて検温したら7度を超える自信はあったから（笑）、教室に入りたくないときは保健室で1．2時間くらいさぼってた」

「中学3年で部活を引退したあと、エネルギーの発散場所がなくなって胃潰瘍のような症状が出たんだよね」

「どういうこと？」

「『何か違う、わかってもらえない、自分でもうまく言えない』みたいなイライラというか怒りというか、そういうのを部活で発散してたのに、その場所を失って。その時、どこかで横になりたいと思って保健室に行った。それからは、朝学校へ行ったら保健室で横になって、調子がよくなったら教室へ行くっていう生活がしばらく続いたなあ」

―居心地はよかった？

「寝られるからよかったですよ」

「保健室にはストーブがあるしね（笑）」

―保健室に行く時って、養護教諭に会いに行きたかったんだろうか、それともその空間に入りたかったんだろうか？

「空間ですね」

「私もそんな気がする」

「優しい先生がいる空間（笑）」

「別室だと『何かあったの？』って誰かに聞かれる。保健室のほうが行きやすい」

―養護教諭に救われた経験は？

「嫌なこととか愚痴とかは、保健室の先生に全部聴いてもらってた。吐き出せる場所はそこしかなかったから」

「保健室の先生にはセクシュアリティは話してないけど、先生のほうがさり気なくそういう話題、『男はね』とか『女はね』みたいなことを、他の子にはするけど自分に対しては避けてくれてた」

「担任の先生だと、個人面談になったり職員室に呼び出されたりして、あとで友だちに『どうしたの？』とか聞かれることにもなる。それがめんどくさい。保健室の

先生はさらっと聴いてくれて、自分にはちょうどよかったですね」

「セクシュアリティを話したことはないけど、もしかしたら何となくわかってくれてたのかもしれないなあ」

「穏やかな雰囲気の人が多いような気がする、養護教諭って。他の先生と違って『指導』しようとしないっていうか。『ああしなさい、こうしなさい』とは言わないだろうという印象があって、学校の中では関わりやすい人だと感じてた」

「保健室の先生は基本いい人だよね（笑）」

―まず養護教諭を対象に研修を、みたいな動きも見えるけど、どうだろう

「うちの学校の養護教諭はすごく頼りになる。セクシュアリティに関する雑誌とかたくさん置いてあったりして」

「養護教諭が一番詳しく知ってるっていうのはわかるけど、他の先生は知らないまま？」

「養護教諭だけ知ってればいいという考え方があるとしたら、養護教諭に任せて済ませようとする人間がいるのが嫌ですね」

「すべての先生が知ろうとして、充分勉強できなくて浅はかな知識で終わってしまうのも、ちょっと心配。ある程度はみんなに知ってほしいけど、せめて養護教諭はきちんと知ってて欲しい」

「知り合いの養護教諭に『性別変える』って話をしたら『よかったねえ、子どももできるじゃん』って言われて（笑）。医療の進歩を過信してないか？（笑）」

「体の構造とかはよく知ってても、たとえば性別適合手術でどこまでできるか、なんていうことは知らない人もいるだろうね」

「ちゃんと勉強しろよ（笑）」

―この場でみんなに聞いてみたいこと、あるかな？

「みんなはカミングアウトしてるの？どうやって切り抜けていってるの？」

「仲のいい友達ひとりだけ話したよ。もともと仲が良くて、聞いてくれるだろうなと思って。他の人にはまだカミングアウトできてないけど、これから年齢を重ねていくうちに自分がもっと強くなれたら、オープンにしていきたいなという思いはある」

「職場とかで『彼女は？』とか聞かれない？」

「聞かれるよ。『いない』で通すとか、パートナーがいることだけ話して性別は明かさなかったりとか。むちゃくちゃごまかしてます（笑）」

「そういう毎日、しんどくない？」

「他に楽しいことを探すようにしてるから。ジムに行ったり買い物に行ったり。セクシュアリティを受け入れたのが実はまだ1年前で、まだ探ってる状態かな。こういう場で他の人の話を聴いて、いろんな人がいるんだということに感動してる」

「私はクラス全員に言ってる。母は『周りの人だけでいいんじゃない？』って言ってくれたけど、話した相手が別の誰かに言って、私の知らないところで変な噂になったり誤解になって広がったりするより、最初からみんなにちゃんと伝えたかった。それでも噂するなら噂して、って感じで」

「私は、わかってくれそうな友だちに『同性愛って偏見ある？』って聞いて、偏見がない人だとわかってから打ち明けるようにしてた」

「私は外見から気づかれるようなことはないし、自分からカミングアウトすることはないけど、会話の中で気になることとか偏見に気がついたら『それってどうなの？　変じゃない？』って相手に言うようにしてる。バイト先でもカミングアウトはしてなかったよ。周囲が気づかなければそのほうが都合いいし（笑）」

「自分はバイトを始めてから手術をして見かけもだんだん変わっていって、でもバイトの子がどんどん入れ替わるから、今はもともとの自分を知ってる子はいないと思う。それでも尋ねられたら答えるよ。そうでない

限りは自分からは何も言わない。もうすぐ就職なんだけど、就職先では完全に隠そうと思ってる。戸籍は変えてないから、言わなきゃいけないのは書類を扱う部署の人と直属の上司くらいかな。そのあとは、どうなるか自分でも予想できない。小さな噂が広がるかもしれない、変なことを言われるかもしれない。けど、ボクはそれはいいと思ってる」

「私は十歳の頃に雑誌で『性同一性障害』を知って、自分はこれかもしれないと気づいたけど、中学でも高校でも誰にも話さなかった。大学生になったら自分らしく生きるんだと決めて、十八歳を目標に一人で耐えた。制服もトイレも、着替えも我慢してたよ。今は手術して戸籍も変えたから、新しくできた友達には手術前のことは話してないし、昔の友だちで今の私を知ってるのは2人だけ。これから同窓会とかあっても、たぶん行かないだろうなあ」

「就職したら『彼氏いないの？』とか『見つけたほうがよくない？』とか、特に飲み会なんかで余計なお世話が多くて（笑）。仕事上の付き合いで、こう言ったらなんだけど、どうでもいい相手（笑）の話は笑いながら適当に聞き流します。でも、信頼したい相手に対してもごまかすのはしんどい時がある。それで、一人だけ、信頼できそうな上司にカミングアウトしてみたんだけど、次の飲み会の時にまた『彼氏できたの？』（笑）。ちゃんと聞いてもらえて嬉しかったのに、わかってはもらえなかったんだなあと。伝えたい人には少しずつ言いつつ、隠してる部分も結構あります」

「私はたぶんストレートでヘテロセクシュアルです。みんなのこれまでの経験の中で『この人、わかってないな』と感じるような言動があったら教えてほしい」

「『偏見ないよ！全然だいじょうぶ！』みたいなやつ（笑）」

「そういう人が一番あぶない（笑）」

「『偏見ないよ』って言いつつ、グサグサ刺してくる人がいる（笑）」

「友だちと遊んでる時、別の友だちからその子に電話かかってきて、その電話に出るように言われた。電話の相手から『お前、男？　女？』って聞かれて『女だけど男』みたいな感じで返したら『あー、最近はやりのやつ！』って（笑）。『それ、コンプレックスなん？』とか、めっちゃ聞いてきて『えーと』みたいな（笑）。それから『顔見せろよ』って言われて、腹が立って言い合いになった」

「それは違うよねえ」

「カミングアウトされたらどうすればいいんだろう、って思う人もいるみたいだけど、さっき質問してくれたようなことを正直に言ってくれるほうが嬉しい。『気になることがあったら言ってね』と言われたら、その都度言うだけですむから」

「それがわかりやすいよね。それくらい率直に言える関係性のほうが、セクシュアリティを抜きにしても、適度な距離感のある関係性なのかもしれない」

「結局、それぞれの人と人との関係性なんだよね。こうでなきゃいけないとか、こうするべき、ではなくて。この相手に対して自分はどうするか、ってことに尽きると思うよ」

今回は小学生やシスヘテさんも含む15名が参加。生き方を探している途上の人、何か一つ達成した人、それぞれの立場からの率直な思いをいろいろ聴かせていただいくことができました。たくさん考えたからこそ言える、深い意見が多かったと思います。

今後もいろいろな年代やテーマでしゃべり場を企画していこうと思います。ありがとうございました。

平成29年3月　　プラウド岡山